

かった、後ほど帰ったことと思えますが。

ナホトカに着いて、思想教育のできていない者は伐採收容所に逆戻りさせられたこともあるというので、

皆、「赤旗」の歌など歌い、スクラムを組んで氣勢を上げた。民主教育が進んだと判断されるグループから第一分所より第五分所に移り初めて乗船が許された。

船の中は大騒動であった。抑留中のアクチブ（活動家）は袋叩きにされ、舞鶴に着いたときは顔が腫れ上がっていた。途中海に投げ込まれたのか、上陸する際、一人足りなかったとのことである。舞鶴に着くと日本の警官が嚴重な監視態勢を敷いていた。便所に行くにも後をつけて来た。

かくして昭和二十三年十一月一日、英彦丸で夢にも忘れなかった故郷に復員する。

しばらく家（兄の家）の農業の手伝いのかたわら、あらゆる仕事に従事、苦勞の末、三年後の昭和二十六年十二月、シゲ子と再婚、家を建て別世帯となり二男の父となる。その間、梅畑の開園など生活基盤の拡充に取り組み現在に至る。

たまたまそれまで住んでいた家が町道の拡幅工事により立ち退きすることになり、平成七年三月、現在地（櫻川一四八一番地の一）に新築移転したところであります。

## 九十九地区第八ラーゲル

山口県 中根 弥太郎

中支戦線湖北省荊門より約一カ月半に及ぶ夜間強行軍で満州四平街に転戦、ソ連軍参戦と同時に戦わずして終戦となり、同時に苦難の強制抑留生活が始まった。黒河を渡って、ブラゴエシチェンスクから一カ月に及ぶ貨物列車の旅となる。そして十月一日、カザフ共和国カラガンダ市にある九十九地区第八ラーゲルに收容される。

以前ドイツ兵が入っていたという收容所は、四方を鉄条網で囲み、四カ所に自動小銃を持ったソ連兵が監視していた。これが四年半にも及ぶ藤部隊千二百人の

地獄の生活の場であった。

初めて入る炭坑。斜坑を歩いて下りると、木の杵が折れ、ボタがボロボロと落ちたり、水たまりがあったり、恐怖この上なし。八時間働いて上がる時は、空腹でめまいがして、倒れる者数知れぬ状態であった。

黒パン三百グラム、粟や燕麦のお粥が飯盒の蓋に一杯、これが入坑するときの食事。終えて上がったときはパンなしで、お粥とスープが一杯。腹の中はからっぽで、食堂を出るのに未練たっぷりであった。

二年後に民主運動が始まり、初めは様子を見ていたが、帰国できないかもしれないと次々と講習に参加した。

私たちの藤部隊は戦犯部隊ということで、三度ゲーペーウーの取調べを受けた。帰れないかもしれないと思ひ、その後は積極的に各行事に参加した。三年後、胃病のため二十日間入院し、退院後OKとなり、炊事勤務に回され、パン屋の責任者となって千二百人の人にパンを切つて渡した。ハラゲルの人で私の顔を知らない人はいないと思う。

思えば、落盤で間一髪命を拾い、高圧線に二度も触れ、二度とも気絶していたこと、幾たびか死線を乗り越え、昭和二十五年二月九日、高砂丸にて夢にまで見た祖国舞鶴に上陸した。

再び我が子、我が孫に青春のない時代を送らせたくないことを祈つて。

追伸、平成七年八月三日、テレビ朝日で放送された「淡々たり、淡々たり、奇才の天才画家」の横山操画伯は、同じ中隊で、ハラゲルで一緒に生活し、帰りも一緒であった。

## 戦後五十年を迎えて

### 敗戦からシベリア抑留

について

東京都 宮本 清

昭和二十年二月繰り上げ卒業で、樺太庁敷香中学を卒業し、新潟県長岡市にある国立長岡高等工業学校夜